



大原 哲史

担当：日本語 中上級

3TIPs

- 1 学生に決定権を委ね、主体的・能動的な学びを深める
- 2 言語と他の事柄を結び付けて学習を振り返る
- 3 発想の転換を大事にして、様々な物事に意欲的にチャレンジする

Q: 授業で学生の学びを高めるために工夫していることは？

A: 「Teaching」よりも学生の「Learning」に焦点を当てることを重要視して授業を構成しています。

「どうしたら学生に上手に教えられるか」ではなく、「どうしたら学生がよく学べるか」、いわゆる主体的・能動的な学びのことを常に考えています。例えば宿題は普通、教員が学生に与えるものですが、昨年从中上級クラスでは学生が宿題の内容や方法を自分で決められる仕組みを

つくり、実施しています。もちろんそれなりの質と量は求めるのですが、「第〇課の文法が弱いから練習する」、「会話が弱いから日本人の友達と話す」など、自身で学習内容を決定し、改善方法を考え取り組んだ成果物を宿題として提出してもらっています。このように学習のプロセスや内容を決める権限を学生に共有することで、卒業後も一生続いていく学ぶ能力を養ってほしいと思っています。

Q: 学生の宿題がバラバラだと評価も難しいのでは？

A: 学生が納得できるような評価をするための仕組みとして自己評価制度を設けています。

今学期からは、学生に自分が考えた宿題の理由と実践後の評価（A+、B など）とその評価理由を書いてもらい、教員は実際の宿題と学生の自己評価を照らし合わせることで、学生の意欲と取り組みを総合的に評価しています。また、具体的な評価基準が統一できない分、教員の評価の理由も学生と共有するようにしています。なりの質と量は求めるのですが、「第〇課の文法が弱いから練習する」、「会話が弱いから日本人の友達と話す」など、

自身で学習内容を決定し、改善方法を考え取り組んだ成果物を宿題として提出してもらっています。このように学習のプロセスや内容を決める権限を学生に共有することで、卒業後も一生続いていく学ぶ能力を養ってほしいと思っています。

学生の学びを高める工夫としてもう一つは、リフレクションをたくさんしてほしいと思っています。一般的に学びには「Practice（練習、実践）」と「Reflection（評価、反省）」が大事だという考え方があります。課が終わるごとに振り返りをして、その積み重ねとして学期末レポートを提

中上級リフレクションシート

名前: _____

1 この課を勉強して、それぞれの項目の満足度や達成度を自分で評価してください。0= not happy at all, 3=somewhat satisfied, 5=Fantastic

A: この課の内容がよく理解できた。 0-----1-----2-----3-----4-----5
 ・学んだ語学・読解・文法をより理解し、活用できるようになった。
 ・読解やディスカッションの内容をよく理解することができた。

B: 他の科目や場面で学んだことを日本語クラスに生かすことができた。 0-----1-----2-----3-----4-----5
 ・専門科目などで勉強した内容、スキル、考えを応用することができた。
 ・大学以外の場面で学んだことを応用することができた。

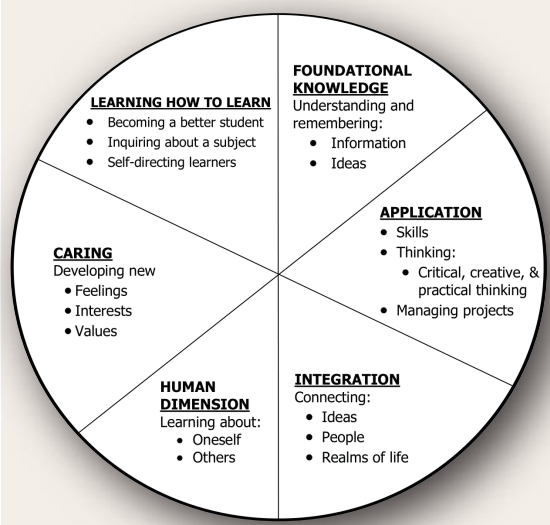
C: この課で学んだことを他の科目や場面で生かす方法を考えた。 0-----1-----2-----3-----4-----5
 ・学んだことが他の科目や場面にどのように関係しているか考えた。
 ・学んだことを他の科目や場面で役立てる方法を見つけた。

◀ 実際の授業で使用している
リフレクションシート

2 あなたの学習のプロセスを自己評価し、良かったところ、変えたほうがいいところを書いてみましょう。

できたこと・うまくいったこと・学んだこと	よくなかったこと・まだよくわからないこと・やめること	新しくすること・もっと学びたいこと・続けていくこと

出してもらっているのですが、振り返りをするとき大切なことが「Significant Learning (意義ある学び)」の考え方です。単に文法、漢字が上手くなった、という振り返りではなく、日本語の授業で学んだことが他の専門授業、日常生活、友人関係、学習方法、自身の価値観や考えにどれくらい影響を与えたか、関連付けて考えられたか、学びが拡張されたかを考えるリフレクションです。これを行うことで他人と同質でない「自分だけの学び」を確立でき主体的な学びを促進する効果があると考えています。



▶ Significant Learning の考え方

Q: 学生のモチベーションを高めるためにしていることは？

A: 個人的に心がけていることとしては、教科書の内容を教えるだけではなく、**なぜその内容を学ぶ必要があるのかを共有**することです。

例えば、学校のコンピュータが使用中に故障したとき、「私がコンピュータを壊しました」という文法しか知らなければ、オフィスに問い合わせても、「弁償してください」と言われる可能性が高いですが、「コンピュータが壊れました」という表現を知っていれば、「ではオフィスが新しい

ものを用意します」という対応が取られる可能性が高くなりますよね。このように文法や表現を知っていることであらゆるシチュエーションを操れる力になるのだと説明しています。ただ勉強をしなさいと言うよりも、語彙や文法が将来のあらゆる状況下の自分を助けてくれるということを加えることで、モチベーションを高めてもらえるのではないかと考えています。

Q: オンラインになって工夫したことは？

A: オンラインになって、授業中や授業前後の「教員⇄学生」、「学生⇄学生」の相互のコミュニケーションが減り、お互いのことを知る機会が少なくなったと感じています。そのため、オンライン授業では、私自身について普段より多く話すようにしています。私自身、大学、大学院と留学経験があるので、その話をシェアすることで私を通して授業に関心を示したり意欲を高めたりしてもらおうことができるのではないかと考えています。

また、学生同士もお互いを知れるように、ブレイクアウトルームに割り当て後、

自由に会話を楽しむ時間を与えています。これは実際に学生から反響があり、人とのつながりが希薄になる中で、情報交換や人間関係が作れていいという声がありました。対面授業のときからペアやグループワークをよく行う授業形態なのでオンラインになってもクラスの半分以上の時間はブレイクアウトルームで過ごしていますし、学生同士の交流を促すためにもルームを頻繁に変えて行なっています。

Q: どのようなステップで授業の改善をされていますか？

A: 特定のステップはありませんが、根底にある中上級の目標（言語のことだけでなく、「自律的な学習者になる」、「自分の学びを拡張できる」、「批判的に考える」）を達成できるように授業内容を考え調整します。言語教員の会議では、実際の研究から APU の学生にも試してみたい内容を提案して授業に組み込んでいくこともあります。

今学期からは学生がクイズ（小テスト）を作成してお互いにそれを出しあってもらう新たな活動も考えていて、具体的には学生が読解問題の課題、選択肢、質問、解答、評価方法を考えて出題しあうとい

Teaching<Learning」の理念です。教員が色々な教材を用意して事細かく指導をするのではなく、学生が学べる授業は何かを常に考え、学習計画を練ったり、教室活動を実践したりするようにしています。

例えば、質問されてもすぐに答えを教えるのではなく、考える時間を与えたり、他の学生に意見を求めたりすることで、思考力が身に付き、クラスメイトを巻き込んだみんなで学びを創る、協働学習の姿勢が構築されます。

クイズやテストの答え合わせ一つにしても「なんでこの答えは間違っているのですか」と学生から質問があれば、「～だ

うものです。いろいろなものを読み日本語の読解能力を伸ばすだけでなく、自分たちでクイズを作成することによって学生の主体的な学びも促進でき、面白そうだと思ったので試してみて、上手くいけば改善方法を検討しながら今後の授業に取り入れていきたいです。

Q: 教育を行う中で大切にしていることはなんですか？

A: やはり、みんなで学びを創っていく環境ですね。その根底にあるのは

から間違いだ」と正すのではなく、クラスで意見交換を始めることが多々あります。言葉は常に変化するものですから、テスト問題で明確な正誤を決めることは難しい場合もあります。日本人はあまり使用しない「インスタント」という英単語を「素早く」という意味で使用した学生から始まった議論では、7 割の学生が正解でもいいと結論を出し、実際にその回答を正解にしたこともありました。ただし、現状で英語をよく知らない日本人には伝わらない可能性があることも共有し、様々な伝え方を知っている方がより多様なシチュエーションで適切に相手と

対話できることを伝え、学びを拡張していきます。5分のできる答え合わせをディスカッションにすると 30 分かかりますが、記憶の定着や考える力にも影響するので、テストで 1 点をあげる以上の価値があると思っています。

Q: 授業を受ける学生に期待することは？

A: 教員も含めていろいろなことにチャレンジしてほしいと思っています。

学生に関しては、言われたからやると

を学生と共有することは教員のチャレンジの一つです。特に私は今でもあらゆることに逆転の発想を用いて新しいチャレンジを試みています。「もし教員が教えなかったらどうなる？」という発想からは、学生の誰かが代わりに教員役をやるというアイデアが出てきました。文法などを練習したときに、教員が主導的に答えを説明するのではなく、学生の誰かに教員役になってもらい学生が協働して答え合わせをしてもらいます。そうすると教員主導で答え合わせをするときよりも授業を受ける学生のリアクションが大きくなり、多様な疑問や意見が飛び交います。

いう受け身の姿勢ではなく自分の考えや本質を織り交ぜて学習に取り組むことが大事だと思います。実際に私がアメリカの大学に通っていたときは、逆転の発想を大事にして勉強をしていました。3つの文献について作文を書く課題では、教員の意図する作文ではなく、あえて違う角度から切り込みつつ、きちんと論理的に教員を納得させられるものを書く挑戦をし、非常に大きな達成感を味わいました。教員に意欲的にチャレンジしてみることはとてもいい学習になると思います。

授業をコントロールする主導権・決定

教員が「Teaching」をしなくても主体的・能動的「Learning」が起き、そして楽しみも追加されるように見えます。それには、学生に授業の主導権・決定権を移譲していくことが重要です。

◇過去の補講のエピソード

補講の授業は学生の参加率が悪いのですが、そのときふとフラッシュモブをクラスに応用できないだろうかという考えが浮かびました。補講に来た、クラスの約 3 分の 1 の学生が次の授業で突然「先

生の代わりに説明したいです！」と次々と手を挙げたらどうなるのか。補講に出席しなかった学生は何が起きているのかわからないのでびっくりしますよね(笑)。理論上、感情が入ると学習のモチベーションが上がるといえる考えがあります。思いつきや、自分の考えも大切に遊び心も交えながら自由に取り組んで、学生が「面白いな」、「これなんだろう」、と思ってくれたら、学習の動機付けとしては成功なのだと思います。最終的に学生の学びを上手く引き出せれば、「Teaching」に関してそんなに強いこだわりはありません。もちろん楽しいだけではなく学びが

拡張できたというところまでつなげることができれば本望ですが、そこまで到達するには私ではなく、学生本人がやらなければならぬ場合もあります。私の専門分野は自律学習なので、最終的には自分で学んでいける力になればいいと思っています。それをサポートするのが教員の役割だと思います。

インタビューの感想

学生に対して今後の学習方法や意欲の道しるべとなる授業を心がけていらっしゃるのことがわかりました。「感情が絡むと学習の意欲は増大する」という理論を基軸として、 Semester 終了時などの節目だけでなく、その場その場で常に思考し、新たな取り組みにチャレンジされていて、学生だけでなく先生自身も楽しんでいるのを感じました。また自己評価制度を設けることで、「課題を提出して終わり」という一般的な講義と異なり、自分が次にやるべきこと、改善すべき点について示すヒントを獲得でき、より深く自分の学習について見つめなおすことができる重要な行程だと思いました。これからの自分の学習にも生かしていきたいと思っています。

「Q」とは



APU で素晴らしい授業を行っている先生方はたくさんいらっしゃいますが、先生方が授業中にどのような工夫をしているのか知ることが出来れば、他の先生の授業改善にも役立つ。そのために、インタビューをして授業の工夫を教えてください、ということで始めた取り組みです。この記事は、授業の「Quality=質」を高める、質を高めるための「Question=問」に答える、授業改善の「Queue=列」をなす、など、色々な意味を込めて「Q」と名付けました。先生方の授業の質向上の「Quest」に役立てられると幸いです。

インタビュー・記事制作：河村あんず
翻訳：MUROMBA Pascal Simbarashe